



石門

心學道の話

四篇

上

9  
3895  
10



門 〇 〇  
號 3895  
卷 10

心學道之話四編卷之上



前席

藝陽 與田壽太講話  
東武 平野橘翁聞書

孟子曰人之有道也飽食暖衣逸居而無教則  
近於禽獸聖人有憂之使契為司徒教以人倫  
父子有親君臣有義夫婦有別長幼有序朋友  
有信

これハ後居も少桑肉の小学も必て此なりと大賢

早稲田大學 蔵書  
號 27.6.16 次  
蔵書

孟夫子此語でこれに文面どうし独りてすしこもあれ  
 何も別段講釈いへばも。おとびませぬるまじと祇  
 どもの中なる。うつくしみのよは情誼を以てしあはれと  
 今日の内なるや此影をいへば。まづ人の有る道やと  
 西行のまはひんて人といふものよ人の及ぶとせつては  
 居ぬものであつたよ誰も及ばずまつて。あつたがうと  
 中へあつて西行のまはれぬとのせまつてあつたは毎  
 日とす。中とす。天地の及ぶかこのごとく形質を造る  
 うまれ出まはれなごのみのハ何でも神居ていへば信と神  
 佛をていへば信と信佛道でいへば信と天の御光明乃信佛

で生れぬ世界何ゲツも及ぶとせまつてあつたは毎  
 日とす。中とす。天地の及ぶかこのごとく形質を造る  
 うまれ出まはれなごのみのハ何でも神居ていへば信と神  
 佛をていへば信と信佛道でいへば信と天の御光明乃信佛







いたがひに世に困のあともをど費して救のゆるませや合ても  
 後工のふ水くけ繕も。わんの役もたづぬるむかや  
 此海ハ止めぬいごと。いよくきあ乃およせめとあう  
 一ハ及とりよるめと。うやきついで六指らぬめのもく聖人  
 のおしくあるのうまうとれ一がトやうふせきついで  
 長りのむく聖人の神一が。あるのうづもとも。その地  
 搜と。あつうと現おて足ぬまぬが。よろうしうせざる。それ  
 とらうく足ぬまぬ一ハ及一ツのよん位やうがぬざり  
 ました。あろしとまハチト おうい中うるむれどこと  
 一ハ道日何戸表一出立つしやぬが。そのころまてよ

けきよりぞ大と二三疋と猫を二三疋とめいあ何  
 来年のに月以まで貴履の西巻へ西何づけやて  
 ませふうし近以西厄害る幸いごうその大猫へ  
 礼智乃又常の及理を説て西とらせトさう又  
 孝弟忠信のまことの道とあおしくあられて下さ  
 中せ。さすまきハ来年に月一ハ私しもすしと西  
 了まぬとづるまきバそのころまではその大補が  
 ううしも五帝の及理とあくる中うしあうし孝  
 弟忠信の誠乃道とあおし中うしもろり  
 それこそまきあ乃。修せめとさうせまきはつてハ

ののこ。ててさびとやものてれーがやけのかるま  
 けつよりのを射とれしも。ささやうおよと下けて  
 ささのゆき子にうりませよと。いられし。さう彼は人  
 も大に小因つ。つさきこと中。ゆでひなう。まけう。おれ  
 かりーろい。ちりーどや。む種と。も。まふん。眼も。あう  
 耳も。ある。けきど。いんぶ人。が。れ。我。れ。智。の。又。業。乃。及  
 理。や。孝。弟。忠。信。の。お。と。ろ。い。と。り。て。さ。う。り。て。も。説。て。す  
 しても。え。来。し。ま。き。は。の。と。居。ぬ。る。の。由。一。歩。下。け。る。ゆ。が  
 出。来。ぬ。さ。う。ん。と。人。と。つ。よ。り。の。い。き。い。ま。の。じ。や。あ。お  
 の。聖。と。つ。ま。る。る。和。城。具。と。万。事。に。急。ま。る。結。核。お

智恵といふ物。生まはつて居るもの。ゆゑその中。うま  
 續し。人でも。文盲な人でも。いつて。さ。さ。さ。ま。れ。に。な。れ  
 ざる。も。ま。い。悪。い。事。を。それ。の。程。じ。や。それ。の。む。と。や。と  
 つ。ま。り。と。あ。い。ま。う。に。ま。し。ける。そ。こ。で。ま。そ。よ。り。は。修。養  
 る。心。と。う。ま。き。は。つ。人。の。身。で。あ。り。あ。が。う。と。い。ふ  
 ろ。後。で。友。小。孟子。が。人。の。道。を。や。と。中。さ。れ。る。あ。い  
 ろ。な。り。ま。し。る。さ。て。飽。食。暖。衣。逸。居。而。無。教。則。近。於。禽  
 獸。と。これ。の。孟子。の。ま。じ。い。の。語。を。め。じ。や。さ。う。り。や。と。ある  
 き。は。誰。が。身。の。う。く。でも。命。の。あ。ら。う。い。ま。の。衣。食。修。養  
 して。あ。る。ま。い。夜。こ。と。ま。い。喰。こ。と。ま。い。求。小。信。と。い。ふ。の。こ。つ



ハツかけても一日も多と。たりり率のあしぬ大切なるの  
 中。それとて、夏一暑てもまづ飽まで食ひとりつては、  
 飲喰と十分して又何となくに夜とらふて身への暑う  
 ぬい中へ寒うちひやう。その時々のそのを台お直し  
 くりりて暑て。まごそのうくにぬ落しも。うごまぬ  
 中へ二暑を度でも三暑を度でも暑寒とつよそのと造て  
 その中小安穩に寐起して居るごと。それとありが、い  
 るも勿作あしむもありのば思ううくして居るを  
 逸病とると。いひまは。そのとつう衣食住の二ツは、  
 十分たまけりまてあつるごと。聖人の教もさうだ

人の屋を字を移しおぬこともぬやうぬぬ  
 もおもいば只のらうと。うくして居るりの會釈に  
 一とつれや。一と會釈とあや。けとりのあ道一は  
 やうなるものトヤとつよふトヤがあんとてア。いし中  
 トやうなる万物の事なる人と高せう同極。いうよ人成  
 びごくつよよとそそのや。モレ。花生あんやう。やも  
 ませぬうと夏ハ一暑也たぐひ不強也てんよや。あぬ中  
 なるものトヤが。うくして居るたら及つて。かんぐ  
 てんやうと。あのを。ぬみ乃。ゆして。ま。ま。う。よ。不  
 と。熱。ある。是。と。い。れ。現。復。う。け。存。ふ。一。よ。つ。て。ア。ウ。

と青生乃中なるどとらとやあいな青生より人たるるを  
 劣るしつらうやうねあせらまきハ青生ハ形らうや  
 ちくせうでもま生乃及とあなねちくし中うハ青生  
 仲間一足もりやせぬそのうちくせうハ口を喰ひ  
 や身よりあつこくやまは作くも人男の中う小十分り  
 五六くね先半るかあまやと重荷負くも曳たり  
 あつい働たハもるけきと口を喰ひのハ口がむきと  
 麦と喰ひ豆と喰ひ粟と喰ひ細葉と喰ひ糠と麦空  
 穂うその外に世界のまらうりの喰てくくくつて  
 るをたよアハ若うんがらる。うくくくくハ軽うく  
 晩を

どきやどる。くくくくくれするら知くんがはく喰ひハ大造  
 喰て居る。まぶ米トやの麦トやのといふ又穀の粒ハ  
 つよにかよむ。その外の野菜りのうら魚や鳥乃  
 命やでみて喰てまぶそのうくに推トやの梨トや  
 の栗トやの柿トやのといふはまおろくの菓物まで  
 余さば渡さば細込ハ何と飽まで喰ひといふもの  
 でハ四月や五月やそれ又ハ九月のころる庭の柿は  
 木の柿が熟ると鳥が来てつた居る。それとて鳥は  
 主か足踏て何といふうとおりハ正々忌くしハ盗人  
 鳥せつらう柿熟るとおりよてたのしむおあるもの

と。ゆめよなきもて。たまるりのウツレ。細とくものも。ちぢ  
 の。ちつこ。無性。いあくる。あもも。よくかんぐて。んま  
 そろと。鳥が。もの。と。い。し。で。は。合。ト。や。自。然。か。し。ず。が。あ  
 と。り。あ。て。ぬ。ろ。う。ド。そ。の。や。ち。ら。う。う。ら。理。結。ち。ま。い。ど。く  
 エ。く。何。ト。や。お。ま。く。と。盗。人。鳥。ト。や。ウ。ツ。リ。ヤ。お。ま。く。ど。よ。し。こ  
 割。合。で。い。こ。し。や。る。ぞ。出。お。方。の。食。の。ハ。五。殺。う。う。野  
 菜。も。の。ま。で。十。分。に。作。つ。て。喰。で。ま。ご。そ。の。う。く。お。ま。く。ら  
 が。中。う。る。鳥。や。魚。乃。命。ま。で。取。て。喰。で。居。る。も。は。命。ま。  
 活。る。ぐ。に。不。自。由。ハ。ち。ら。う。ま。の。ね。ま。ら。ハ。又。出。お。方。と。違。ふ  
 て。よ。是。の。そ。ら。つ。ぬ。も。の。あ。れ。ば。農。地。と。そ。の。も。の。も。叶。は

平生本の枝とす。う。く。て。居。り。の。る。を。バ。ハ。中。う。ふ  
 本。乃。え。ご。お。ま。く。と。そ。の。や。ド。我。お。ま。く。う。が。た。り。乃。天  
 此。賜。り。の。と。是。納。し。て。居。り。の。と。そ。を。と。出。お。方。が。我  
 そ。の。私。に。樹。ち。決。身。に。と。ご。さ。ん。る。ハ。お。れ。ら。ご。り。の  
 と。お。ま。く。お。が。反。つ。て。盗。取。と。る。の。ト。や。あ。い。う。よ。し。ま。さ  
 そ。の。刻。で。あ。い。も。せ。上。母。様。乃。二。ツ。や。二。ツ。せ。あ。て。お。れ  
 ら。よ。是。つ。ま。き。こ。と。く。さ。よ。く。出。お。方。が。こ。の。命。の。の。れ  
 歳。と。ら。ふ。不。ご。の。り。も。あ。る。ま。の。に。扱。り。く。お。ま。く。考。ハ  
 是。事。と。知。し。ぬ。相。殺。る。人。違。し。や。チ。ト。和。と。知。し  
 や。ま。エ。し。ち。ら。ま。盗。取。人。る。め。し。ら。ふ。や。し。も。知。ま。さ。ん。が

心法為その中に理結ぶもして居るごとくよイヤヤ  
 を振心むとよく為ふもして下げてあやまら純文  
 ても書つやけりね次才トヤガ為ハその中うまは  
 判ずむうよの心藏乃屋根へ通てカアクアホウク  
 とけ方智を先うてあるをうりてマアくはたぐは  
 仕合て心なるやれ叔又疑ふ事あることども畜せうハ  
 友をわりの毛衣一牧でつらふ事一ツあてよと  
 つらふ牛もあへが浴衣一牧よとつらふとつらふも  
 おいそきんマア人るハ友をなれば惟子トヤの事お  
 トヤの故帳トヤの莞筵トヤの汗衫トヤのと暑

この處でも十分なる事よあまバ給申す布子やら  
 類ハ秋冬や一層冬やら寒や一層寒申すて  
 この處でも十分なる。そんなやうなつらふ暖に  
 為て居るつらふのでハ。つらふをそのつらふの  
 結搦ハその人ハつらふやうなつらふ人ハつらふ  
 中う合限相違の家作してやそのつらふに  
 へ亭トヤの那屋トヤの敷奇屋トヤのつらふ  
 ても建ひらげ多の天枿をつらふやして居る  
 ぐ。そきでも肝心る道つらふものつらふとそき中  
 秋をちうめてつらふ。つらふの世が来トヤのヤレ求

相しやの人おとやのそれうそろく暇ぐ入んたと  
 イヤ死灵トやの活靈トやの運トやの肩トやの  
 里トやの祟トやのこ己おのれが惡病とむうく中らむ  
 暇をらうろギロくしてま道のかる日お中風痛ら  
 粗人をらる中ふ大飯喰へんレクリく後う嘔  
 んどろ。さるをうろ。なんの役もまぬのころうま  
 世界の危害りのトやが何とそまてハ。はらぬ  
 をのトやあへう元來人ハその中ふ大飯喰へん  
 ハアスウく復讐にまくと世界トやうへ。さうなる  
 と私しる中ら書生よりへるうた劣ると中らの

ふまかけ並のあつしうろしや。さうしうろや中らこ  
 さん方のすトやあへんぞ。まねしう身の懺悔  
 トやさるしうろそ人ハ兵く人の屋と何さうめて  
 その屋と命かどう根かどう動りけしう分は中ら  
 いらぬ。その又屋とへんしうろそ性ハ率ふ之と道と  
 りよと子思ハ中庸ハ洗あられ道と性ハ率と而  
 已と朱子もいつてまをまとして認しう中ら性の  
 中ら動りけしう道トや。さうろろその性といふの  
 成元來マアどの中らるものもサやうなるものも  
 皆同じくのでハ率ふ道が知まぬう。それで出門でん

先生石田先生や子孫先生がまら我性を知まは  
 本心と知れのと程がたのこもせぬよ一白青と打て  
 ともあらきこのので心なるやん。あうしその又  
 性を知るの幸んを知るのこやれこも何れもその  
 先生方の今更替他てつるれこもそのこも  
 せぬ己おそのこもと孔子ハ易に理と窮り性とそ  
 して今おつるこも涉脱おさき孟子ハ心と  
 そのれりのハ中性を知る貴性を知まば則天を知る  
 こも説ておられまこ。そまにまこその性の徳と  
 是まりのトやのイヤ悪るものトやのイヤ善で

もるこ悪でもあいのトやのイヤく善悪ハ混トと  
 ものトやのとむトの渾沌の葉者元が銘くさぬ  
 ぐし性乃倫とせられまこも畢竟その性とのよ  
 りのと元來どうやなるものよこ身がこ知  
 是らので率よりこもねる。そそそののこあり  
 づろくに性の論とせまここのので心なるまも  
 さまれば父母を知るこつよこま。あつるこもむり  
 づろその性徳の場所も何れも替つてこも考め  
 るこでもありや性やせぬ。こつぞ誰處も心志  
 と心志もそれの心志と知る心徳のこも行







の掃除するすべし知れぬ人もあつるものトやが。そりや皆  
 むくの知微高倍達が世世界の凡夫またハかの色身の  
 執着する様々さぬぐま羨と見えて感鬼きて居るも  
 不。その眼とさすして。やろよとて那卒トやのや致  
 トやのイヤ八穢トやの九穢トやのとりあつてやとて  
 放さきと空鉄炮の音と魂消て生れうーかかそ  
 飛る人達トや突れやが。世世社中ハさうのよ人の言  
 ぬとかあは淡うされ中するおとほよ水瓶ハあ乃  
 垢。塵をうらうと垢とおとん糖袋ハ糖の粉が強  
 るとやら。つるも心なきうきんが教も。てうとそめ

とあつ佛とくハ仏と修しき悟つとくハ悟りよまよふ  
 て肝らな。かのきくが初めトやあはね孝弟忠信の及  
 と金持トとと大切な天命の家業後分とバ持て  
 虚をてん後て死をさするうらうとくへのがねハ  
 かくけるりの也それをむくの達大師もまた  
 毒に。おとられとや。世塵と捨く道を教めんと  
 歎きりのハ捨も鬼角を求るが。とらめて今日  
 の世乃親めのかに列道とつよそのとるひ未む  
 るハ捨ど有もせぬ鬼の角とるひる中うなりのだ  
 やと大なる眼と。むとて。つまらうてかうき



でのりて又十八と。まづ日蓮宗のい世界の勢は  
 一と一と天の海は妙法といつてあつて廿三十大  
 千世界ハミミ妙法の中のものといふれどもやといつて  
 あり又念佛宗でハ光明遍照十方世界念佛の生  
 持取不捨といつてあつて法々阿彌陀の光明ハ遍  
 く十方世界と答へし。いふはせんがくもれしも  
 そのハ光明の中に持し取て助けぬのそいふるけれ  
 ど廿方考がかの念佛の生といふ六根の底乃  
 わちいふまゝの信といふのよはしむね。その  
 明と我々うるるもどつてあつて。いふはせんがくもれしも  
 成はす

りハ出来ぬ。それでは念佛の生といふを持し  
 取て捨法といふてあつて。その念を護まは法持  
 人乃持不 中のまゝ

